

論文の要旨

「価値観形成学習」による「倫理」カリキュラム改革
－「在り方生き方教育」から「市民性教育」へ－

広島大学大学院教育学研究科
博士課程後期文化教育開発専攻
D120778 胤森 裕暢

I. 論文題目

「価値観形成学習」による「倫理」カリキュラム改革
－「在り方生き方教育」から「市民性教育」へ－

II. 論文目次

序 章 本研究の意義と方法

第1節 研究主題

第2節 研究の特質と意義

第3節 研究方法と論文構成

第1部 「倫理」カリキュラム改革のための基礎研究

第1章 「市民性教育」としての「倫理」の意義

第1節 市民的資質を育成する「倫理」教育の意義

第2節 「市民性教育」と価値観形成

第3節 「市民性教育」としてのカリキュラム開発の視点

第2章 市民性教育からみた「倫理」カリキュラムの現状と課題

第1節 学習指導要領「倫理」カリキュラムのねらい－「在り方生き方」の確立－

第2節 「在り方生き方教育」としての「倫理」カリキュラムの課題

第3章 「在り方生き方教育」としての「倫理」単元の改善と課題

第1節 「倫理」単元の類型化の指標

第2節 教養としての価値観理解型単元

第3節 倫理的問題に対する価値観理解型単元

第4節 教養としての価値観形成型単元

第5節 「倫理」単元の課題－倫理的問題に対する価値観形成型の単元を求めて－

第4章 「市民性教育」としての価値観形成学習理論の展開と課題

－「在り方生き方教育」から「市民性教育」への転換（1）－

第1節 価値観形成学習理論の展開

第2節 「開かれた価値観形成」をめざす学習理論

第3節 「社会的合意形成能力」の育成をめざす学習理論

第4節 「合理的な思想形成」をめざす学習理論

第5節 「価値認識を成長させる」学習理論

第6節 価値観形成学習理論の課題

- 第5章 新たな「価値観形成学習」によるカリキュラム改革
 - －「在り方生き方教育」から「市民性教育」への転換（2）－
 - 第1節 関連諸学における価値観形成
 - 第2節 新たな学習理論としての「価値観形成学習」
 - 第3節 「価値観形成学習」の目標
 - 第4節 「価値観形成学習」の方法原理
 - 第5節 「在り方生き方教育」と「市民性教育」としての「倫理」学習の対比

第2部 市民的資質を育成する「倫理」カリキュラムの開発研究

- 第6章 「価値観形成学習」による「倫理」カリキュラムの編成原理
 - 第1節 「倫理」カリキュラム編成の視点
 - 第2節 「倫理」カリキュラムの構造
 - 第3節 「倫理」カリキュラムのデザイン－年間指導計画－
 - 第4節 「価値観形成学習」の授業構成
- 第7章 現代社会の倫理的問題と自己の価値観形成を考える単元開発
 - 第1節 単元「エリクソンとサンデルの技－倫理的問題と自己の価値観形成を考える－」の開発
- 第8章 現代の社会構造における倫理的問題を考える単元開発
 - 第1節 単元「プラトンとその師ソクラテスから学ぶ－民主主義の倫理的問題を考える－」の開発
 - 第2節 単元「ジョブズとゲイツの挑戦－資本主義の倫理的問題を考える－」の開発
- 第9章 現代の文化構造における倫理的問題を考える単元開発
 - 第1節 単元「山中教授と日野原医師の願い－生命に関する倫理的問題を考える－」の開発
 - 第2節 単元「孫社長とザッカーバーグCEOの描く未来－情報に関する倫理的問題を考える－」の開発
 - 第3節 単元「マータイとカーソンの訴え－環境に関する倫理的問題を考える－」の開発
- 第10章 現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成する単元開発
 - 第1節 単元「オバマとアインシュタインの呼びかけ－倫理的問題に対する自己の価値観を形成する－」の開発
- 終章 成果と課題
 - 第1節 研究の成果
 - 第2節 今後の課題

Ⅲ. 論文要旨

序 章 本研究の意義と方法

本研究は、「人間としての在り方生き方に関する教育」（以下、「在り方生き方教育」）としての公民科「倫理」を「市民性教育」としてのそれへと改革するために、新たな「価値観形成学習」という考え方に基づいてカリキュラムを開発することを目的とする。

現代社会では既存の価値観により直ちに判断できない倫理的問題が生じ続けている。このため市民には、現代社会の倫理的問題をよく認識し、それに対する自己の価値観を吟味したり、修正したりする資質、すなわち価値観を形成してゆく力が必要だと考えられる。このような資質のことを「価値観形成力」と定義しておく。この育成には、生徒が倫理的問題を自らのこととして捉え、それに対する自己の価値観を吟味・修正する学習が必要と考えられる。こうした主体的で開かれた学習のことを「価値観形成学習」と定義する。

こうした視点から、高等学校学習指導要領に代表される従来の「倫理」カリキュラムを見ると、教師が先哲等の価値観を教示し、教養として理解させることに止まり、生徒が主体的で開かれた価値観の形成をするようにはなっていない。背景には、「在り方生き方教育」としての「倫理」の学習原理及び目標・内容・方法があると考えられる。この課題克服には、従来の「倫理」カリキュラムを「市民性教育」としてのそれへと改革する必要がある。新たな学習原理である「価値観形成学習」の構築とカリキュラム開発が必要となる。

本研究の特質と意義は、次の3点に集約される。

1点目は、従来の「倫理」カリキュラムに関する研究が、学習指導要領公民科「倫理」に代表される「在り方生き方教育」としての、すなわち特定の「人生観、世界観ないし価値観」を理解させるものに止まっていたのに対し、本研究が、自らに関わることとして現代社会の倫理的問題を認識し、それに対する自己の価値観を形成していく、「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムへ転換を図る改革研究になっていることである。

2点目は、「在り方生き方教育」としての「倫理」の課題を克服しようとした従来の価値観形成学習の理論と授業が、単元レベルの開発に止まっていたのに対し、本研究は年間指導計画まで視野に入れ、カリキュラムの全体像を明らかにしようとしていることである。

3点目は、新たな「価値観形成学習」に基づいて単元を計画し、高等学校での研究授業等を通し、その批判的分析に基づいて理論仮説と単元計画を吟味・修正し、現時点で到達した授業モデルとして開発していることである。

本研究は基礎研究と開発研究の2つに分かれており、次の手順と方法による。

第1部の基礎研究では、自己の価値観を形成するという視点から、学習指導要領に準拠した「倫理」、それを改善しようとした実践、さらに価値観形成学習の諸理論を取り上げ分析し、残る課題を抽出し、改善の方向性を明らかにする。具体的には、①「在り方生き方教育」として性格づけられる学習指導要領の公民科「倫理」等を分析し、課題を明らかにする。②その課題を克服しようとしてきた「倫理」授業改善の実践を分析し、残された課題を明らかにする。③その課題をも乗り越えようとしてきた「市民性教育」、すなわち社会認識教育における価値観形成学習の理論を分析し、なお残る課題を抽出する。④これらの課題を克服し、「在り方生き方教育」としての「倫理」カリキュラムを「市民性教育」

としてのそれへと改革する学習原理となる「価値観形成学習」の理論仮説を構築する。

第2部の開発研究では、新たな理論仮説に基づくカリキュラムの編成原理を明らかにし、それに基づいて開発した年間指導計画及び、そこに位置づく全ての単元の授業モデルを示す。具体的には、⑤「価値観形成学習」によるカリキュラム編成の視点を明らかにし、カリキュラムの構造、カリキュラムデザイン（すなわち年間指導計画）、単元の授業構成を明らかにする。そして、⑥このカリキュラム編成原理に基づいて全単元を作成し、高等学校等での研究授業を通して吟味・修正し、授業モデルとして完成させる。

第1部 「倫理」カリキュラム改革のための基礎研究

第1章 「市民性教育」としての「倫理」の意義

本章では、現代社会における市民的資質を育成する上で「倫理」教育が持つ意義を明らかにするとともに、市民性教育、特に社会認識を通して市民的資質の育成を目指す社会認識教育において価値観形成が持つ意味を明らかにし、本研究で「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムを開発していく視点を明らかにした。

「価値観形成力」育成には、主体的な現代社会の認識を通して市民的資質を育成しようとする公民科、特に「倫理」の学習において、生徒が自ら現代社会の倫理的問題に対する価値観を形成してみる必要がある。したがってカリキュラムは、社会認識を通して生徒が自ら価値観を吟味・修正する、すなわち主体的で開かれた価値観の形成をするものとなる。また、それを年間を通じて繰り返していくものになると考えられる。

こうした視点から現場の「倫理」カリキュラムを分析すると、先哲等の思想や考え方を教示する工夫に止まり、生徒が、いかに手がかりを見出し自らの価値観を形成するのか（またそれを繰り返すのか）、いかに倫理的問題を認識するのかは明らかでない。さらに学習は受け身的で、閉じられた価値観形成をすることに止まっていると考えられる。この背景としては、従来のカリキュラムが、学習指導要領公民科「倫理」の趣旨と内容構成を吟味しその課題を明らかにしないまま、基準として受け入れてきたことがあると考えられる。

第2章 市民性教育からみた「倫理」カリキュラムの現状と課題

本章では、「倫理」等科目の改訂の趣旨や目標、さらに内容構成の分析を行い、高等学校学習指導要領「倫理」が抱えてきた、カリキュラム開発上の課題を明らかにした。

これまで「倫理」等科目は、一貫して次のことをねらいにしてきた。まず、社会認識教育である社会科、公民科に位置付きつつ、高等学校における道德教育の中核的役割を期待されてきた。次に、生徒の人生観・世界観（公民科では「在り方生き方」あるいは「人生観・世界観ないし価値観」）を確立しようとしてきた。また、このために先哲等の思想や考え方を理解させ、自己の価値観について考えさせようとしてきた。ただし、現代社会と倫理的問題の認識は重視されてこなかった。これらのことは、公民科「倫理」として「在り方生き方教育」の中核的な指導場面となってから明確になってきたと考えられる。

また「在り方生き方教育」としての公民科「倫理」の内容構成は、固定的な価値観形成を図るようになっており、主体的で開かれた価値観を形成していく上で課題を抱えている。

第1に、現代社会と根本にある倫理的問題について、十分な認識ができない。このことにより、確立ないし形成される価値観は、固定的で閉ざされたものとなり、現代社会の倫理的問題に対するものとはならないと考えられる。第2に、先哲等の思想や考え方、すなわち他者の価値観を、現代社会の倫理的問題に対する価値観を形成する手がかりとして扱うことが難しい。これにより他者の価値観を、教師が生徒に理解させておく、ないしは教え込んでしまうことになる。第3に、「価値観形成力」ないしは倫理的な見方や考え方を育成するために、生徒が繰り返し、主体的で開かれた価値観の形成を行うようにはなっていない。このような課題を抱えている公民科「倫理」によってカリキュラムを開発しても、「価値観形成力」の育成はできないと考えられる。

第3章 「在り方生き方教育」としての「倫理」単元の改善と課題

本章では、高等学校現場の「倫理」カリキュラムと「在り方生き方教育」としての学習指導要領「倫理」とが抱える課題を改善しようとしてきた、実践的研究及び開発された単元を分析し、残された課題を明らかにした。

いずれも生徒が、教養あるいは倫理的問題に関するものとして教示された価値観を、理解しておくことに止まっていたり、自ら価値観を見い出しても、それを手がかりに現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成していくようにはなっていなかったりした。

この課題克服には「倫理」授業を、現代社会の倫理的問題を認識した生徒が、それに対する他者の価値観を見い出し手がかりにして、自己の価値観を吟味したり修正したりしてみる「倫理的問題に対する価値観形成型」へ変えていく、すなわち学習を、倫理的問題に対する開かれた価値観の形成ができるものへと転換していく必要があると考えられる。

第4章 「市民性教育」としての価値観形成学習理論の展開と課題－「在り方生き方教育」から「市民性教育」への転換（1）－

本章では、従来の授業が抱えてきた課題を克服し、「在り方生き方教育」としての「倫理」を「市民性教育」としてのそれへと転換するために、社会認識教育においてこれまで構築されてきた価値観形成のための学習理論について分析し、なお残る課題を抽出し、「倫理」の授業理論の構築とカリキュラム開発の方向性を明らかにした。

いずれの価値観形成学習においても、いかに他者の価値観を手がかりにして自らの価値観を吟味・修正する学習にしていくか、すなわち、生徒がより主体的に倫理的問題に対する価値観を形成していくにはどうすればよいかという課題を抱えていた。そして年間を通してどのような現代社会の倫理的問題を取り上げればよいかという課題も残された。

第5章 新たな「価値観形成学習」によるカリキュラム改革－「在り方生き方教育」から「市民性教育」への転換（2）－

本章では、こうしたカリキュラム改革の方向性に基づいて、「在り方生き方教育」としての「倫理」を「市民性教育」としてのそれへと転換していくため、広く関連諸学における価値観形成の理論からも手がかりを得つつ、新たな理論仮説を設定した。

関連諸学では価値観形成は、既にある自己の価値観を、多様な他者の価値観を吟味し取捨選択したり、それらと対話したりしつつ自ら修正していくこととされる。またそのため

に今日の自然や社会の認識が不可欠とも考えられている。これまでの考察も踏まえるなら、「市民性教育」としての「倫理」は、より主体的で開かれた学習へ転換することが求められており、そのためには新たな学習理論仮説が必要となる。

新たな「価値観形成学習」の目標は、「在り方生き方教育」としての「倫理」が価値観の確立を目指したのに対して、現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成する資質、「価値観形成力」の育成を目指す。なぜなら、人間は価値観を確立してゆく主体であり、現代社会の変化に伴い、自ら価値観を形成し直してゆく必要があるからである。

学習の内容は、現代社会の倫理的問題及び手がかりとなる価値観が内包する現代の倫理及び倫理的な価値となる。また学習の方法は、自ら価値観を形成していくこととなる。すなわち生徒が主体的に、多様な他者と対話し、倫理的問題に対する自己の価値観を吟味し修正する。この学習を繰り返し、価値観を形成し直していくことで、「価値観形成力」を育成していくことができると考えられる。

第2部 市民的資質を育成する「倫理」カリキュラムの開発研究

第6章 「価値観形成学習」による「倫理」カリキュラムの編成原理

本章では、新たな「価値観形成学習」の理論仮説による、「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムの編成原理を明らかにした。

第1節では、「倫理」カリキュラムを編成する視点を明らかにした。それは現代社会の倫理的問題の認識を十分にできるようにすること。倫理的問題に対する特徴的な価値観を持つ人物モデルを手がかりに、生徒自ら価値観を吟味・修正し、またそれを繰り返し行うようにすること。そして、いかに倫理的問題を自らのこととして捉え、自己の価値観を吟味したり修正したりすればよいか生徒が理解し、実際にやってみようようにすることである。

第2節では、開発していくカリキュラムの構造を明らかにした。先ず年間の導入部である中単元（1）では、現代社会にある倫理的問題に気付いて、それらを自らのこととして捉え、それらに対する自己の価値観を表現してみて、それぞれをよりよくしていくための方法について理解し、具体的な学習の計画を立てることになる。

次に展開部である中単元（2）では、それらの倫理的問題に対する自己の価値観を、多様な他者の価値観を手がかりにして吟味したり、修正したりする。先ず「現代の社会構造における倫理的問題を考える単元（展開部A）」の学習をしてから、次に「現代の文化構造における倫理的問題を考える単元（展開部B）」の学習を進めていくことになる。なぜなら、生徒が現代社会における文化的な諸現象及びここに内包されている価値意識・価値体系についてよく考えていくには、それらを規定している客観的な基盤である社会構造とそこにおける価値意識・価値体系に関しても、さかのぼって考えることが必要となるからである。

そして終結部である中単元（3）は、これまで学習してきた倫理的問題と関わり、それらの中核と考えられるような問題に対して、これまで形成してきた自己の価値観を、また新たな他者の価値観を手がかりにしながらか吟味し、必要ならば修正して、自己の価値観を形成する。また、年度当初の自己の価値観をどのように吟味し、修正してきたのか、どのように形成してきたか、またどのように学習を計画し実施してきたか評価してみるようになる。

第3節では、カリキュラム構造に基づくデザイン、年間指導計画を明らかにした。その特徴は、現代社会及びそこに内在している倫理的問題の認識を中心に据えて編成していること。また例示の人物モデルは、それぞれの倫理的問題によく関連しており、生徒がこれらを手がかりにすれば、問題に対する自己の価値観を吟味したり、修正したりできるようになっていること。さらに年間の導入部と終結部では、価値観を形成する方法を学習できるようになっており、生徒は、倫理的問題に対する自己の価値観を形成する方法を理解してから年間の学習に取り組み、最後にそれを振り返るようになっていることである。

第4節では、単元の授業構成を教材と授業過程とに分けて明らかにした。

教材の中心は現代の倫理や価値を含み、生徒にも関わる現代社会の倫理的問題である。また倫理的問題に対する手がかりとなる価値観も必要となる。具体的には複数の人物モデルによる問題に対する考え方（価値観）と生き方である。

授業過程は、生徒が倫理的問題に対する自己の価値観を、多様な他者との対話を通して主体的に吟味・修正するよう組織する。具体的には次のようになる。生徒が、①身近な社会問題を認識し、そこに内在する倫理的問題に気づき、自らにも関わりのあることを理解する。②自分が既に有している問題に対する考え方（価値観）を、ツールミン図式等を用い表現し、対象化してみる。③こうして構造的に明示した互いの考え方が正当であるかどうか吟味し合う。④2つの他者との対話、すなわち人物モデル及び他生徒との対話を通して、自己の考え方を吟味・修正していく。⑤こうして修正した互いの考え方を発表し合い、仲間達による考え方、「議論の束」として図式にまとめ、それをもとに各自の考え方も図式にまとめる。⑥当初の自分の考え方の図式をいかに修正したか、計画と実際の学習（他者との対話等）は適切に行えたかを評価し、残された課題を考える。

第7章～第10章 「価値観形成学習」による「倫理」の単元開発

各章では、「価値観形成学習」による「倫理」のカリキュラムデザイン、年間指導計画に基づいて全単元の授業開発を行った。

第7章では、年間の導入部（中単元(1)）として「エリクソンとサンデルの技－倫理的問題と自己の価値観形成を考える－」を開発した。生徒は、自分にも関わる現代社会の問題に気づき、自分はどうすべきか等と問われる。この倫理的問題に対し生徒は、自己の価値観を吟味・修正し、形成していくにはどうすればよいか考え、エリクソンとサンデルのことを調べ、「人物研究」や「対話」という方法を理解し、年間の学習を計画する。

第8章では、年間の展開部（中単元(2)）の中の「現代の社会構造における倫理的問題を考える単元（展開部A）」として、2つの単元を開発した。先ず単元「プラトンとその師ソクラテスから学ぶ－民主主義の倫理的問題を考える－」では、生徒が「選んだ代表者が民主主義を廃止しようとしたら我々はどうすべきか。」という問題に気づき、自分のこととして捉える。また、この問題に対する手がかりとなる人物モデルとして、古代アテネのソクラテスとプラトンのことを取り上げる。

次に、単元「ジョブズとゲイツの挑戦－資本主義の倫理的問題を考える－」では、生徒が「資本主義の仕組みの中で消費者と生産者の幸せをともに実現するには、企業はどのような商品を生産すべきか。」という問題に気づき、自分のこととして捉える。また、この問題に対する手がかりとなる人物モデルとして、現代の資本主義社会で活躍してきたステ

イーブ・ジョブズとビル・ゲイツのことを取り上げる。

第9章では、年間の展開部（中単元(2)）の中でも「現代の文化構造における倫理的問題を考える単元（展開部B）」として、3つの単元を開発した。

まず、単元「山中教授と日野原医師の願いー生命に関する倫理的問題を考えるー」では、生徒が「ますます長寿化してゆく社会で、自分は医療をいかに活用して生きていけばよいか。」という問題を捉える。また人物モデルとして、医療関係者あるいは高齢者である、山中伸弥教授と日野原重明医師のことを取り上げる。

次に、単元「孫社長とザッカーバーグCEOの描く未来ー情報に関する倫理的問題を考えるー」では、生徒が「よりよい生活のために、われわれはインターネットの規制や活用をいかに行えばよいか。」という問題を捉える。また人物モデルとして、インターネット関連企業の経営者である孫正義社長とマーク・ザッカーバーグCEOを取り上げる。

そして、単元「マータイとカーソンの訴えー環境に関する倫理的問題を考えるー」では、生徒が「なぜわれわれが地球環境を保護しなければならないのか。」という倫理的問題を捉える。また人物モデルとして、環境倫理に対する異なる視点を得るために、ワンガリ・マータイとレイチェル・カーソンのことを取り上げる。

第10章では、年間の終結部（中単元(3)）として単元「オバマとアインシュタインの呼びかけー倫理的問題に対する自己の価値観を形成するー」を開発した。生徒は学習してきた倫理的諸問題を踏まえ、文化構造及び社会構造と深く関わっていると考えられる科学・技術に関する倫理的問題「核兵器の保有は仕方がないと、認められるか。」を捉える。また形成してきた自己の価値観だけでなく、さらに異なる立場からの手がかりを得るために、人物モデルとしてバラク・オバマとアルベルト・アインシュタインのことを取り上げる。

終章 成果と課題

本研究の成果は次の3点である。1点目は、従来の「倫理」カリキュラムが「在り方生き方教育」としてのものに止まり、現代社会の根本にある倫理的問題に対して、生徒が自ら価値観を形成してゆく資質を育成するものになっておらず、「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムに転換する必要があることを明らかにし、そのための新たな学習理論として「価値観形成学習」を構築したことである。2点目は、この理論仮説に基づいて、改革すべき「倫理」カリキュラムの全体像を構造及び年間指導計画として明らかにしたことである。3点目は、「価値観形成学習」に基づく全ての単元を開発したことである。

本研究の課題は次の2点である。1点目は、全体を通して研究授業を行い、それに基づいて理論の有効性を実証するとともに、開発してきたカリキュラムを修正・改善していくことである。2点目は、カリキュラム及び学習の評価方法を開発することである。

IV. 主要参考文献

1. 朝倉隆太郎・平田嘉三・梶哲夫編『社会科教育学研究 2 社会科カリキュラム研究の新理論』明治図書, 1976年.
2. 足立幸男『議論の論理 民主主義と議論』木鐸社, 1984年.
3. 安彦忠彦編『新版 カリキュラム研究入門』勁草書房, 1999年.
4. W. M. アレキサンダー編, 中留武昭訳『未来の高校 価値形成の教育』学事出版, 1975年.
5. 池野範男「市民社会科の構想」社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ』明治図書, 2003年.
6. 石川照子「価値分析力を育成する社会科の授業－白神山地の入山規制問題－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第14号, 2002年.
7. 石原純「公民科における生命倫理問題の授業構成」全国社会科教育学会『社会科研究』第55号, 2001年.
8. 依田新他編『現代青年の性格形成』金子書房, 1973年.
9. 伊東亮三「社会認識教育の理論的基礎」内海巖編著『社会認識教育の理論と実践－社会科教育学原理－』葵書房, 1971年.
10. A. ウェストン著, 野矢茂樹他訳『ここからはじまる倫理』春秋社, 2004年.
11. 上田薫『上田薫社会科教育著作集・4巻 徳目主義との対決』明治図書, 1978年.
12. 大杉昭英「社会科における価値学習の可能性」全国社会科教育学会『社会科研究』第75号, 2011年.
13. 大塚健司「高校倫理で体系性と主題性を統合する試み－『競争』を教材化する－」日本公民教育学会『公民教育研究』Vol. 1, 1993年.
14. 尾原康光『自由主義社会科教育論』淡水社, 2009年.
15. 澤瀉久敬『哲学と科学』NHKブックス, 1967年.
16. 貝塚茂樹監修『戦後道德教育文献資料集 第Ⅱ期 20 社会科と道德教育』日本図書センター, 2004年.
17. 片上宗二「社会認識と市民的資質」社会認識教育学会『社会科教育学ハンドブック』明治図書, 1994年.
18. 加藤尚武『哲学原理の転換』未来社, 2012年.
19. 金子晴勇『対話的思考』創文社, 1976年.
20. 川本隆史『現代倫理学の冒険』創文社, 1995年.
21. 菊池章夫『社会化研究「序説」』川島書店, 2011年.
22. 工藤文三「高等学校倫理科に関する教科教育学的考察」日本公民教育学会『公民教育研究』Vol. 4, 1996年.
23. 久野昭『倫理学の概念と形成』以文社, 1977年.
24. B. クリック著, 関口正司監訳『シティズンシップ教育論』法政大学出版局, 2011年.
25. 黒田亘『行為と規範』勁草書房, 1992年.
26. 桑原敏典「合理的な思想形成をめざした社会科授業構成－シティズンシップ・エデ

- ュケーションの目的と社会科の役割の検討を踏まえてー」全国社会科教育学会『社会科研究』第64号，2006年。
27. 小玉重夫『シティズンシップの教育思想』白澤社，2003年。
 28. 児玉康弘「『公民科』における解釈批判学習」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第16号，2004年。
 29. 小原友行「小学校社会科における市民的資質育成の理論と授業構成ーB.G. マンチャラス，T. カルトソーニス，J.L. バースの場合ー」『高知大学教育学部研究報告』第1部第35号，1983年。
 30. 小原友行「意思決定力を育成する歴史授業構成ー『人物学習』改善の視点を中心にー」廣島史學研究會『史學研究』第177号，1987年。
 31. 小原友行「学習の主体性」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第35集，1988年。
 32. 小原友行「社会科における意思決定」社会認識教育学会編『社会科教育ハンドブック』明治図書，1994年。
 33. 小原友行「社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論の革新ー21世紀の学校教育における社会科の役割ー」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第10号，1998年。
 34. 財団法人日本青少年研究所『中学生・高校生の生活と意識』，2009年3月。
 35. 財団法人日本青少年研究所『高校生の心と体の健康に関する調査』，2011年3月。
 36. 作田啓一『生成の社会学をめざして 価値観と性格』有斐閣，1993年。
 37. M. J. サンデル著，鬼澤忍訳『これからの「正義」の話をしよう』早川書房，2011年。
 38. 三宮真智子編著『メタ認知』北大路書房，2008年。
 39. 塩野谷祐一『価値理念の構造』東洋経済新報社，1984年。
 40. 塩野谷祐一『経済と倫理』東京大学出版会，2002年。
 41. 篠原一『市民の政治学』岩波書店，2004年。
 42. 島崎隆『増補新版 対話の哲学』こうち書房，1993年。
 43. 社会認識教育学会著，伊東亮三編集代表『社会科教育の21世紀』明治図書，1985年。
 44. 全国公民科・社会科教育研究会編『高等学校公民科 指導と評価』清水書院，2003年。
 45. 鑪幹八郎『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版，2002年。
 46. 谷田増幸「高等学校にける『在り方生き方教育』の充実に向けた公民科教育の役割ー新学習指導要領を踏まえた課題と展望ー」日本公民教育学会『公民教育研究』Vol. 18，2010年。
 47. 田淵五十生『国際理解・人権を考える社会科授業』明石書房，1990年。
 48. J. デューイ著，清水幾多郎・清水禮子訳『哲学の改造』岩波書店，1968年。
 49. S. E. トゥールミン著，戸田山和久訳『議論の技法』東京図書，2011年。
 50. 東京都高等学校倫理・社会研究会編『公民科「倫理」「現代社会」教材化の研究』東京書籍，1994年。
 51. 東京都高等学校倫理・社会研究会編『公民科「倫理」の指導内容の展開』清水書院，1992年。
 52. 長友敬一『現代の倫理的問題』ナカニシヤ出版，2010年。
 53. 二宮皓編著『市民性形成論』日本放送出版協会，2007年。

54. 日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，2014年.
55. 日本社会科教育学会編『社会科における公民的資質の形成－公民教育の理論と実践－』東洋館出版社，1984年.
56. 野矢茂樹『新版 論理トレーニング』産業図書，2006年.
57. 波多野誼余夫編『自己学習能力を育てる』東京大学出版会，1980年.
58. 福澤一吉『議論のレッスン』NHK出版，2002年.
59. P. フルキエ著，久重忠夫訳『公民の倫理』筑摩書房，1977年.
60. 藤沢令夫『哲学の課題』岩波書店，1989年.
61. 藤田昌士『道徳教育 その歴史・現状・課題』エイデル研究所，1985年.
62. 藤原保信『自由主義の再検討』岩波書店，1993年.
63. B. ヘルツル他著，島崎隆監訳『哲学の問い 討議用』晃洋書房，2002年.
64. C. G. ヘンペル著，黒崎宏訳『自然科学の哲学』培風館，1967年.
65. D. ボーム著，金井真弓訳『ダイアローグ』英知出版，2007年.
66. K. R. ポパー著，森博訳『客観的知識』木鐸社，1974年.
67. 松下良平『知ることの力 心情主義の道徳教育を越えて』勁草書房，2002年.
68. 丸山高司『人間科学の方法論争』勁草書房，1985年.
69. 溝上慎一『自己形成の心理学』世界思想社，2008年.
70. 溝口和宏「開かれた価値観形成をめざす社会科教育－『意思決定』主義社会科の継承と革新－」全国社会科教育学会『社会科研究』第56号，2002年.
71. 見田宗介『価値意識の理論』弘文堂，1996年.
72. 村井実『教育学入門（上）』講談社，1976年.
73. 村井実『道徳は教えられるか』国土社，1967年.
74. 村上陽一郎『文化としての科学／技術』岩波書店，2001年.
75. 森分孝治「歴史教育の革新－社会認識教育としての歴史教育－」全国社会科教育学会『社会科研究』第20号，1972年.
76. 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書，1984年.
77. 森分孝治「市民的資質育成における社会科教育－合理的意思決定－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第13号，2001年.
78. 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書，1978年.
79. 行壽浩司「公民科『倫理』における価値判断力の育成－エンハンスメント問題に焦点を当てて－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第24号，2012年.
80. 横山利弘監修『在り方生き方教育』学陽書房，1994年.
81. 吉田武男『「心の教育」からの脱却と道徳教育』学文社，2013年.
82. 吉村功太郎「市民性の育成をめざす社会科授業の開発－公共性を視点に－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第17号，2005年.
83. 吉村功太郎「社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第59号，2003年.
84. H. ヨナス著，加藤尚武監訳『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』東信堂，2000年.